広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	知能優秀児のことばを拾う
Author(s)	兼村，道子
Citation	児童の言語生態研究 , 7 : 51 - 53
Issue Date	1975-05-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045083
Right	
Relation	

■特別寄稿

知能優秀児のことばを拾う

兼村道子

時と場合に応じて適切なことばを話すことは、たいへんむつかしいことで、ことばを探しているうちに、まわりの状況はどんどん先に進んでしまい、ああ、あの時はこう言えばよかったのに、と思った時は、もう、後の祭だということの繰り返しの毎日である。

特に、幼児の知能訓練に立ち合う私の仕事の基本は、幼児とのことばの受け答えが大事を左右する。助言などいう簡単なことばづかいでは、幼児の知能は、それに追随する働きを示すか、あるいは、それに反撥することに働きを移してしまうだけである。

だから、そのやりとりを写して、ここに報告する結果になることが、私にはたいへん恐ろしいのであるが、どこまでも、眼を転じていただいて、訓練中の幼児の発言やつぶやき、ひとりごとを連ねることによって、彼等たちの思考の軌跡を辿ることを主眼点としてほしい。

また、このことは決して弁解ではなく、私などの基本姿勢でもあり、口を開くよりも前に、まず観、まず聴くことから始まる仕事だと思っている。

以下、知能優秀児といわれる子どもたちのわずかな、断片的な報告であるが、課題を解く過程を、彼等たちのことばが、よく投影している。（もちろん、彼等たちのいわゆる外言・内言活動が、課題解答へ向かわせるのか、それがいずれであるか、私にはわからない）

とにかく、私には、彼等たちの思考とことばとは分離せず、不足することなく、余剰なくぴったりと的確であって、自由自在に思われるのである。全体的特質とまではいえないにせよ、この子どもたちに、ひとりごとの多いのも、今後の一つの課題だとも思っているのである。

Y君は三歳八か月。

二枚羽の蝶々をたくさん用意し、三色のクレヨンを使って色のくみあわせの違う蝶をいろいろ考える課題を与えた時のこと、Y君は蝶の羽を

赤と緑　赤と青　青と緑

にぬった後、しばらく考えて、緑と赤にぬった。そして、それがさっきぬった赤と緑のと同じである、と気がついた。

（この二つは左右の色が反対になっているので、ちがう、と考えてもよいし、現に他のクラスで四才二か月のM君は『スッテンコロリンしちゃったの』と言って、ちがう、ことの方を強調したが、Y君は『ア、おんなじ』といったので私はY君の思考に立ち入らないことにした。だからY君が反対だけど同じ、と考えたのか、赤と緑だから同じ、と考えたのかはっきりわからない）

困ったY君は赤いクレヨンをにぎってしばらく考えていたが、

『赤のまんまにすればいいんだ』

といった。最初私はその意味がわからなかったのだけれど、Y君はそれまで片方の羽を赤くぬると、赤いクレヨンを置いて、もう片方は何色にしたらいいかなあーと考えていたのだった。そして、みどりにするとさっきのと同じだし、青のもやっちゃったし、みどりと青でもダメだし……　と三本のクレヨンを見くらべながら考えた末、

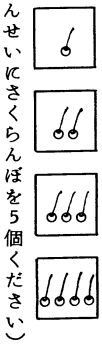
〈そうだ、とりかえないで、そのままこっちも赤にすればいいんだ！〉

と思いついたのだ。

Y君は考えたことがそのまま言葉になって出てくるうらやましいこどもの一人で、思考の過程をまるでお手本のように示してくれる。

課題『5になる数のくみあわせ』

材料　1から4までの数カード合計三十六枚、数はさくらんぼで表わしてある。



（せんせいにさくらんぼを5個ください）

『これ1234、4だねー』

『これ123、3だねー』

――――。

『ならべて？』

（「ええ……」）ならべてもいいのよ、という言葉

を呑込んで、2枚使ってもいいのよ、と言った方がよいか、と一瞬考えるが、これも言わずにおいてみる。

Y君は2と3のカードを並べて、12345、とかぞえた。

何といってもY君は三歳、3と2で5、と考えたのではなく、3のカードを取って、123、とかぞえ、あと2つあれば5になる、と考えて、2のカードと3のカードをならべて5にしたのである。

（3と2で5ね、ありがとう、これはせんせいのね）と言ってそのままセロテープで壁にはりつける。

（じゃあこんどはおばあちゃんにもさくらんぼを5個あげることにしようか。これとはちがうくみあわせにしてください）

くみあわせ、ということばがわかったのか（くみあわせってなあに、などと聞かれると私はことばにつまってしまうのだが：）幸いY君は∧3と2∨にして、

「いまやったねー」

∧2と3∨にして、

「いまやったねー」

∧1と2∨∧2と2∨∧3と1∨などをためしたあげく、

「ひとつじゃだめだねー」

「みっつならべればいい」

といって∧2と2と1∨の組合せにした。

3はかぞえなくても3とわかるY君だが、4になると1234、とたしかめたくなるY君だから、ならべて5にするのは無理もないが、試行錯誤ではなく、何とか数の操作に持っていけないものか、と考えて、

（どうしたら5になったの？）とたずねてみる。

「2つと2つと1つのと」

（そうね。2と2と1で5になったのね）

（もっとつくれる？）

「また5つくるの？」

「なくなるまで？」

与えたカードが多過ぎたな、と思いながら減らすわけにもいかず、（ええ、なくなるまで）という。

「そんなに5できるかね」

これは、そんなにたくさんあるカードがなくなるほどちがう作り方がたくさんあるのかね、という意味である。そう言いながらもY君は考えた。

「またおんなじになっちゃった」

「ひとつばっかり」

ここまでY君は3種類のくみあわせ方を考えた。そして更に∧1と1と1と2∨∧3と1と1∨を作ったが、その後はどうしても前に作ったものと同じになってしまう。

やむなく（どんなのを使ってないかよく見てごらん）という。

「これがいれてないんだ」

これというのは4のことである。

このようにしてY君は1から4までのカードを使って5をつくるつくり方の全部を考えついたが、もとより、（ちがうくみあわせを考えてください）などということばから、くみあわせ方をいろいろ考えるのだ、とわかったのではなく、5をつくるためにはならべなければだめで、どれとどれをならべるかをY君はあれこれ考えていたのだと思われる。しかし、∧221∨と∧212∨を同じと考えていたということは、単にならべ方を変えようとしたのではなく、数のくみ合わせを考えていたといってもよいのではないか。ならべるとはくみあわせを考えることだったのだと解釈してもよいのではないか、とも考えてみる。

ところで、（ちがうくみあわせを考えてください）ということをY君はまことに素直に受け取ってくれたが、こういう時にO君（小二）は必ずいやがらせをする。

「へえー　ちがうくみあわせを考えるの、そんなの簡単だよ」

と言って横に並べたカードを縦に並べかえるのである。同じクラスの女の子Kちゃんはムキになって

「ちがうわよ、数のくみあわせのことでしょ」

とたしなめるがO君は平気。

カードを渡して（O君このカードをよくきってください）と言えば

「きるの、きるからはさみ持ってきて」

（今日は立ってから名前を呼びます）

「立てばいいの」

（はいそうです。立ってください）

「ハイ立ちました」

と言って机の上に立つ。

ここでムキになってはいけない。O君は決していやがらせをしているのではなく、ことばを楽しんでいるのである。

O君は語彙もそれほど豊富であるというわけではなく、形で考えることや、記号で考えることにくらべると、ことばで考えたり表現したりすることは必ずしも優れているとは言えない子どもであるが、たいへんユニークなことを考えつく。

課題『2からはじまって5になる式をどんどんつくってください』

O君の答

a　2＋3＝5　　b　2×2＋1＝5

c 200 − 50 − 50 − 95 = 5

d 20-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1 = 5

2からはじまって、というと普通はaやbのタイプを考えるが、O君はcのようなことをやりはじめるのである。

課題『4からはじまって10になる式をどんどんつくってください』

Sちゃん『せんせいどうしてここはこんなに広いんですか』

（さあ、答えがたくさん書けるように、ということでしょう）

『ひとつでいっぱいにする方法あるよ』

といってO君はさっきの3倍位の大きな字で長い式を書くのである。

課題『ビラ・ネオン・テレビ・ラジオ、をまとめて何と言ったらよいでしょう』

『ネオンて何のこと？』

ネオンサインがパッと思い浮ばなかったのであるが、

『ネオンておとうと、のことか』

音・音（ネオン） → おとおと → 弟

といった工合である。毎回こんな調子だから、拡散思考では力を発揮する。

課題『次のもののおもしろい利用法を考えてください』

うきぶくろ ― 輪なげの輪、怪獣の首輪、ブレスレット

ほうき ― けんかの道具、魔法使いのほうき

スプーン ― 人をぶつ、音楽の道具（コップをたたく）、超能力をためす、目の検査

けい と ― はげの人の毛にする、つけひげ、つけまつ毛、はち巻

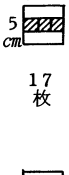
ホース ― はら巻、マフラー、望遠鏡、おもちゃのへび、なわとび、ロープ、ストロー、でんわ、まわしてあそぶ

片方しかないげた ― かかしのくつ、投げる、ハンコにする、材木として使う、げたうらない、半分にして鳴らして楽器にする

人間は遊戯する存在であるといわれ、特に幼児のあそびは生活そのものであり、知恵の発達の上からも大切に考えられているが、子どもにとっては、考えることすなわちあそぶことであるように思われる。だから、むつかしい課題を解決する過程を楽しみ、新しい発見に感嘆の声をあげる。

課題『道つくり』

材料



内矩25センチの正方形のパネル

（これを上手につないで道をつくりましょう。この箱の中にきちんと入るようにしてください）

M君『ぼくはよこ』

『つるみたいな形になっちゃった』

― まだかなりあまっている。

『いったん取ってもう一度考えなおそう』

T君『ぼくはたて』

『やっぱりやめて』

― 縦につなげたのではすぐに壁にぶつかるのでどうしても曲げなければならないのである。

一つ完成した後、二つ目を作りながら

『さっきのとおなじじゃつまらないからな』

K君『ふつうの道じゃないことにして裏がえしちゃお』

（おもてではだめなの？）

『うーん、何とかうまい方法ないかしら』

M君K君は五歳五か月、T君は五歳二か月

課題『数の性質を考える』

材料　数カード1から10まで、おはじき

数はいろいろな性質を持っていることに気づかせることをねらって授業を進める。

六歳のSちゃんは、30のものを2人で分け、3人で分け、4人で分け、2こ余り、5人で分け、6人で分ける。いろいろな人数で分けられることはわかったが、それだけに終る。

A君（四歳六か月）10までの数を2人で分ける、3人で分ける、ということで精一杯。

Hちゃん（四歳三か月）12このものが、2人で分けられ、3人でも4人でも分けられ、5人では2こあまるのに、6人にすると分けられたので、変だな、という顔をする。

N君（四歳四か月）10までの数を2人で分けてみたり、3人で分けたりしているうちに6は2人でも3人でも分けられることに気づいて、

『6っていいね』

考える、ということは大変なことではなく人間の自然ともいうべき働きで、必然的な要求とさえ言える。その考えるという働きの中でことばの果たす役割は絶大なものがあるわけで、ことばの引き出し方によって知能を高めることができるのかもしれないし、少くとも下手な教え方をすると知能が伸びないどころか、活躍しないということだけは云えるように思う。

（英才教育研究所員）